

1. 結婚の幸福度の定義

結婚の幸福度とは、「既婚者が、自身の結婚生活に対してどのような評価を与えているかを数値化したもの」として定める。

結婚の幸福度は、県民アンケートのうち、既婚者に対して行った問 27 の⑨「総合的に見て、現在の結婚生活は幸福である」から得られた回答選択肢の数値を、次の計算式に当てはめて求めたものである。

$$\text{結婚の幸福度} = \frac{4 - \text{問27⑨の市町別平均値}}{3} \times 100$$

回答選択肢は、リッカートスケールと呼ばれる尺度を用い、「1 とても合致する」「2 やや合致する」「3 あまり合致しない」及び「4 まったく合致しない」として数値化した。なお、1 から 4 の数値は、「結婚生活は幸福である」と感じている強さの順序を示している。

また、当該設問では数値が小さくなるほど「幸福である」度合が強くなる。

このため、結婚の幸福度が高いほど、数値が大きくなるように反転させて表示されるよう、計算式を設定している。

更に、結婚の幸福度を 100 点満点（下限値 0 点）で表示されるよう設定している。

2. 結婚の関心度・イメージ度の定義

結婚の関心度とは、「未婚者が、自身の将来の結婚についてどの程度の関心を持っているかを数値化したもの」として定める。

結婚の関心度は、県民アンケートのうち、未婚者に対して行った問 31 の「将来、結婚をしたいと思いますか」から得られた回答選択肢の数値を、次の計算式に当てはめて求めたものである。

$$\text{結婚の関心度} = \frac{4 - \text{問31の市町別平均値}}{3} \times 100$$

回答選択肢はリッカートスケールを用い、「1 強く思う」「2 多少思う」「3 それほど思わない」及び「4 まったく思わない」としており、1から4の数値は、「将来、結婚をしたいと思う」と感じている強さの順序になっている。

なお、結婚の関心度も、結婚の関心度が高いほど、数値が大きくなるように反転させて表示されるよう、計算式を設定している。

更に、結婚の関心度を100点満点（下限値0点）で表示されるよう設定している。

また、結婚のイメージ度とは、「未婚者が、自身の将来の結婚生活に対してどの程度の前向きなイメージを持っているかを数値化したもの」として定める。

結婚のイメージ度は、県民アンケートのうち、未婚者に対して行った問38の⑨「総合的に見て、結婚すれば幸福になると思う」から得られた回答選択肢の数値を、次の計算式に当てはめて求めたものである。

$$\text{結婚のイメージ度} = \frac{4 - \text{問38⑨の市町別平均値}}{3} \times 100$$

なお、問38⑨の回答選択肢は、結婚の幸福度に関する問27⑨とまったく同じであるため、結婚のイメージ度の計算式は、結婚の幸福度の計算式と同一になっている。

3. 結婚の幸福度・関心度と合計特殊出生率との相関

本分析は、合計特殊出生率を直接分析の対象とするものではなく、あくまで若者の結婚に対する意識を集団的に観察し、それらに影響を与えている要因の分析を目的としている。

具体的に述べると、既婚者については、若者が自身の結婚生活に対してどのような評価（結婚の幸福度）を与え、その評価がどのような要因に影響されているのかを明らかにすることを目的としている。

また、未婚者については、若者が自身の将来の結婚についてどの程度の関心（結婚の関心度）を持ち、その意向がどのような要因に影響されているのかを明らかにすることを目的としている。

合計特殊出生率の変動要因を詳細に分析した先行研究として、岩澤(2015)があり、近年における少子化の要因の9割が初婚率の低下によるものと結論付けている。

このことから、まず、結婚の幸福度・関心度・イメージ度と合計特殊出生率との関係性について確認を行った。それをまとめたのが表2である。

表2は、各市町の幸福度・関心度・イメージ度と合計特殊出生率との相関係数を示したものである（市町別の合計特殊出生率は、人口の少ない地域の極端な出生率を補正するため、経験的ベイズ法と呼ばれる手法を適用した推定値を使用している）。

相関係数 r は、2項目間の関係の強さを示す指標で、一般的には、概ね $0.5 \leq r \leq 1$ の場合は「一方の項目の値が高く（低く）なるほど他方の項目の値も高く（低く）なる関係（正の相関）」、概ね $-0.5 \geq r \geq -1$ の場合は「一方の項目の値が高く（低く）なるほど他方の項目の値は低く（高く）なる関係（負の相関）」が存在するとみなされる。

しかし、これは標本から得られた数値を大枠で評価するための一つの基準にすぎないため、相関係数の有意性（母集団に相関関係が認められること）を検定することも重要である。

■表2：合計特殊出生率と結婚の幸福度等との相関係数

合計特殊出生率 (H20～H24) との相関係数	結婚の幸福度		結婚の関心度		結婚のイメージ度	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
	0.13	0.53	0.40	0.10	0.37	-0.03

※相関係数：0のとき無相関、-1、1のとき相関関係が最大

相関係数が0.50以上の場合（強い相関がある場合）は黄色で表示

なお、相関係数が5%水準で有意であることが認められた

これを見ると、女性の結婚の幸福度（既婚者）については、合計特殊出生率と強い相関関係が認められるが、男性の結婚の幸福度（既婚者）については、ほぼ無相関であった。

一方、女性の結婚の関心度・イメージ度（未婚者）については、合計特殊出生率との相関関係が認められず、男性についても相関関係の数値はそれほど高くないことから、結婚の関心度・イメージ度が、男性の結婚の幸福度（既婚者）と同様、合計特殊出生率にそれほど強く影響していないことが示されている。

このような特徴が生じた理由の一つとして、合計特殊出生率の指標としての性質にあると推察される。

合計特殊出生率は、子どもを出産することが可能であると仮定される年齢期の女性人口と当該年齢期にある女性が実際に出産した子ども数に基づいて算定されており、女性が「出産した・しなかった」という事実が計算上の基礎になっている。

よって、結婚の関心度・イメージ度と、「出産した・しなかった」という事実との

間に関連性が見られなかったことは、必ずしも不自然なことではない。

しかしながら、このような事実は、表3で示しているとおりに、結婚の関心度・イメージ度が、将来の合計特殊出生率と無関係であることを意味するものではない。

表3は、結婚の関心度・イメージ度について、未婚の男女の「理想の子ども数」（問32）及び「将来予定する子ども数」（問33）との相関係数を求めたものである。

■表3：関心度・イメージ度と未婚者の「理想の子ども数」・「予定する子ども数」

相関行列		理想の子ども数		予定する子ども数		結婚のイメージ度	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性
結婚の関心度	相関係数	0.38	0.40	0.48	0.51	0.57	0.56
結婚のイメージ度	相関係数	0.29	0.31	0.33	0.29	—	—

※相関係数：0のとき無相関、-1、1のとき相関関係が最大

相関係数が0.50以上の場合（強い相関がある場合）は黄色で表示

なお、相関係数が5%水準で有意であることが認められた

これを見ると、結婚の関心度については、「理想の子ども数」及び「予定する子ども数」並びに「結婚のイメージ度」との間に相関関係が認められ、男女とも結婚の関心度が高いほど、「理想の子ども数」や「予定する子ども数」を多く回答していることが予測できる。

留意点として、女性の相関係数が、「理想の子ども数」及び「予定する子ども数」とともに男性のそれより高いことである。合計特殊出生率は、女性が出産した実際の子ども数に基づいていることから、女性の結婚の関心度並びに「理想の子ども数」及び「予定する子ども数」は、将来の合計特殊出生率を左右する要因となり得ると考えられる。

また、結婚のイメージ度については、男女とも「理想の子ども数」や「予定する子ども数」と強い相関関係は認められないが、表3のとおり、結婚の関心度と結婚のイメージ度との間の相関係数は男女とも0.5を超え、強い相関関係が認められることから、間接的には結婚のイメージ度もまた、将来の合計特殊出生率を左右する要因となり得ると考えられる。

以上から、合計特殊出生率との関連で、結婚の幸福度・関心度・イメージ度の要因を分析する場合には、男性よりもむしろ女性に焦点を当てることが有効であると考えられる。

次節では、結婚の幸福度・関心度・イメージ度について要因の分析を行うが、参考までに幸福度・関心度・イメージ度を指標化するのに使用した項目（問 27⑨、問 31、問 38⑨）と「理想の子ども数」及び「予定する子ども数」をクロス集計した平均値を表 4 にまとめた。

■表 4：選択肢別の「理想の子ども数」と「予定する子ども数」の平均値

関連指標		結婚の幸福度				結婚の関心度				結婚のイメージ度			
		既婚者				未婚者							
選択肢		問27⑨：総合的に見て現在の結婚生活は幸福である				問31：将来、結婚をしたいと思うか				問38⑨：総合的に見て結婚すれば幸福になる			
		理想の子ども数		予定する子ども数		理想の子ども数		予定する子ども数		理想の子ども数		予定する子ども数	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
高 ↑ ↓ 低	とても合致する ／強く思う	2.47	2.30	2.31	2.20	2.30	2.28	2.31	2.30	2.33	2.28	2.30	2.24
	やや合致する ／多少思う	2.28	2.29	2.13	2.17	2.16	2.00	2.15	2.03	2.17	2.15	2.14	2.17
	あまり合致しない ／それほど思わない	2.07	2.12	1.87	1.87	1.79	1.59	1.57	1.41	1.91	1.82	1.77	1.71
	まったく合致しない ／まったく思わない	2.29	2.00	1.86	1.49	1.10	1.07	0.66	0.30	1.34	1.24	1.18	1.36
合計		2.39	2.28	2.22	2.14	2.10	2.06	2.05	2.04	2.09	2.05	2.04	2.05

一番下の行の「合計」では、結婚のイメージ度の「予定する子ども数」を除いて、男性の方が女性よりも平均値が高い。

また、結婚の幸福度・関心度・イメージ度のいずれにおいても、「とても合致する」（幸福度、イメージ度）、「強く思う」（関心度）の平均値が、男女ともに最も高い数値を示しており、結婚の幸福度・関心度・イメージ度が、合計特殊出生率に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

4. 結婚の幸福度・関心度と相関のある要因

本節では、結婚の幸福度・関心度に影響を与える要因のうち、年収などの経済的要因を除くものについて、回帰モデルを用いて相関関係を分析する。回帰モデルとは、「結果となる項目」と「要因となる項目」の関係を明らかにするため、統計的手法により、その関係性を数式として表したものである。

まず、モデルに使用する項目は、外的要因（暮らし・生活に対する考え方）に関連するものと内的要因（結婚に対する考え方）に関連するものに分け、それぞれ関連する複数の項目を一つの項目に統合し、合成変数を作成した（表 5）。

結婚の幸福度の分析で用いる外的要因は、居住している市町の「暮らしの満足度」

(問 11 右の設問)から抽出した複数の項目を一つの項目としてまとめたものであり、内的要因は「結婚の決定要因」(問 26)から抽出した複数の項目を一つの項目としてまとめたものである。

外的要因及び内的要因に充てた項目は、いずれも調査によって得られたすべての項目から、結婚の幸福度を説明する項目として相関のあるものを精査した結果として得られたものである。

次に、合成変数を使い、結婚の幸福度に関する回帰モデルを次のように設定した。

$$\underbrace{\boxed{\text{結婚の幸福度}}}_{\substack{\text{結果} \\ \text{(被説明変数)}}} = \underbrace{\left(\underbrace{\text{影響度}}_{\text{<係数>}} \times \boxed{\text{暮らしの満足度}}_{\text{<合成変数 1>}} \right)}_{\text{外的要因}} + \underbrace{\left(\underbrace{\text{影響度}}_{\text{<係数>}} \times \boxed{\text{結婚の決定要因}}_{\text{<合成変数 2>}} \right)}_{\text{内的要因}}$$

一方、結婚の関心度の分析において、結婚の幸福度と同様に、外的要因及び内的要因を用いた回帰モデルを設定しようとしたところ、内的要因である結婚のイメージ度以外に直接相関のある項目を見出すことができなかった。

ただし、結婚のイメージ度と直接相関のある項目に「暮らしの満足度」があった。

このため、結婚の関心度については、結婚のイメージ度を用いた回帰モデルと、結婚のイメージ度と相関のあった「暮らしの満足度」から作成した合成変数(表 6)を用いた回帰モデル(2つのモデル)を次のように設定した。

$$\underbrace{\boxed{\text{結婚の関心度}}}_{\substack{\text{結果} \\ \text{(被説明変数)}}} = \underbrace{\left(\underbrace{\text{影響度}}_{\text{<係数>}} \times \boxed{\text{結婚のイメージ度}} \right)}_{\text{内的要因}}$$

$$\underbrace{\boxed{\text{結婚のイメージ度}}}_{\text{中間結果}} = \underbrace{\left(\underbrace{\text{影響度}}_{\text{<係数>}} \times \boxed{\text{暮らしの満足度}}_{\text{<合成変数 3>}} \right)}_{\text{外的要因}}$$

なお、前節で明らかにしたように、合計特殊出生率との関連では、結婚の幸福度・関心度・イメージ度の要因を分析する場合に、女性に焦点を当てることが有効であると考えられることから、女性の結婚の幸福度・関心度について、分析を行った。

(1) 結婚の幸福度と関連のある要因

市町別に見た「暮らしの満足度」は、多くの項目で結婚の幸福度・関心度と関連がある。

しかし、調査対象者である住民が暮らしに重要ではないと思っている項目を施策の参考にすることはできないことから、「暮らしの重要度」（問11左の設問）が低いものを分析の対象にすることは適当ではない。

そこで、結婚の幸福度の要因分析には、県全体の既婚女性の「暮らしの重要度」の平均値（値が1.0に近いほど重要と考える度合が高く、値が4.0に近いほど重要と考える度合が低い）が1.5を下回る項目から、結婚の幸福度と関連のある「暮らしの満足度」に関する項目の選択を行った。これは、回答者の多くが「かなり重要な項目である」と回答していることを意味する。

なお、既婚女性の「暮らしの満足度」及び「結婚の決定要因」の合成変数を作成するために使用した項目は表5にまとめておいた。

■表5：合成変数の作成に使用した項目（女性の結婚の幸福度）

合成変数名	要因の区分	使用した項目	
暮らしの満足度 ＜合成変数1＞	外的要因	問11（市町）	④～⑥、⑪～⑬、⑮
結婚の決定要因 ＜合成変数2＞	内的要因	問26	②、⑤、⑥、⑧～⑩

問11の質問項目

- | | |
|--------------------------------|--|
| ①品揃えの豊富な店が近くにあること | ⑨住む地域の景観や町並みが美しいこと |
| ②電車、バス、タクシーなど公共的な交通機関が利用しやすいこと | ⑩保育所などの数や定員を増やすことにより、待機児童を解消すること |
| ③道路の渋滞が解消され、自動車での外出が快適なこと | ⑪失業の不安がなく働けること |
| ④住居に要する費用が大きくないこと | ⑫いろいろな働き方が用意され、自分の生活に合った就業ができること |
| ⑤急病時に受診できる医療機関があること | ⑬労働と余暇のバランスがとれ、自身や家族のために十分な時間が確保できること |
| ⑥安心して子どもを出産できる医療体制が整っていること | ⑭市町や職場において、独身の方への結婚支援が充実していること |
| ⑦高齢者や障害者が、安心してまちに出かけられること | ⑮育児休業の積極的な取得奨励など、仕事をしながら子育てしやすい環境であること |
| ⑧利用しやすい公園、図書館など公共施設が近くにあること | |

問26の質問項目

- | | |
|-----------|-----------------|
| ①相手の学歴 | ⑦共通の趣味の有無 |
| ②相手の職業 | ⑧自分の仕事に対する理解と協力 |
| ③相手の年齢 | ⑨家事・育児に対する能力や姿勢 |
| ④相手の収入 | ⑩相手の両親や家族 |
| ⑤相手の性格や人柄 | ⑪自身が改姓しないこと |
| ⑥相手の容姿 | |

一方、第3章の「市町別分析シート」では、結婚の幸福度の要因分析ではなく、各市町における、既婚男性及び既婚女性の「暮らしの満足度」の現状を参考値として示すことを目的としている。

なお、既婚女性と比べて既婚者全体の「暮らしの重要度」は、1.5を下回る項目が少ないことから、結婚の幸福度の要因分析での「重要度の平均値1.5未満」の基準をやや緩め、県全体の男女の平均値2.0を下回る項目のうちから、「暮らしの重要度」上位6項目（問11：④～⑥、⑪、⑬、⑮）を選択した。

項目選択の基準はやや緩めたが、「かなり重要な項目」だけではなく「まあまあ重要な項目」と回答した人が多い項目も含まれていることから、「暮らしの満足度」を評価する上で重要な項目であることには変わりがない。

(2) 結婚の関心度と相関のある要因

前述のとおり、結婚の関心度の分析については、結婚のイメージ度を要因とした回帰モデルを設定することになるが、その前段階として、結婚のイメージ度を「暮らしの満足度」で説明する回帰モデルを設定する。

まず、結婚のイメージ度の要因分析において、結婚の幸福度の要因分析と同様、結婚のイメージ度と相関のある「暮らしの満足度」に関する項目を選択し、合成変数を作成した。

なお、合成変数作成において使用した項目は、表6にまとめた。

■表6：合成変数の作成に使用した項目（女性の結婚のイメージ度）

合成変数名	要因の区分	使用した項目	
暮らしの満足度 <合成変数3>	外的要因	問11（市町）	①、②、⑪、⑮

問11の質問項目

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①品揃えの豊富な店が近くにあること ②電車、バス、タクシーなど公共的な交通機関が利用しやすいこと ③道路の渋滞が解消され、自動車での外出が快適なこと ④住居に要する費用が大きくないこと ⑤急病時に受診できる医療機関があること ⑥安心して子どもを出産できる医療体制が整っていること ⑦高齢者や障害者が、安心してまちに出かけられること ⑧利用しやすい公園、図書館など公共施設が近くにあること | <ul style="list-style-type: none"> ⑨住む地域の景観や町並みが美しいこと ⑩保育所などの数や定員を増やすことにより、待機児童を解消すること ⑪失業の不安がなく働けること ⑫いろいろな働き方が用意され、自分の生活に合った就業ができること ⑬労働と余暇のバランスがとれ、自身や家族のために十分な時間が確保できること ⑭市町や職場において、独身の方への結婚支援が充実していること ⑮育児休業の積極的な取得奨励など、仕事をしながら子育てしやすい環境であること |
|--|---|

項目の選択基準は、未婚女性の「暮らしの重要度」のうち、県全体の平均値が 2.0 未満で、結婚のイメージ度と統計的な関連が認められる項目としている。

「暮らしの重要度」の基準を、結婚の幸福度の場合（平均値 1.5 未満）よりもやや緩くした理由は、選択すべき項目の数が少なくなり、多様なシミュレーションが難しくなるためである。

こちら、第 3 章の「市町別分析シート」では、各市町における、未婚男性及び未婚女性の「暮らしの満足度」の現状を参考値として示すことを目的としている。

そのため、県全体の男女の平均値 2.0 を下回る項目のうちから、「暮らしの重要度」上位 6 項目（問 11：④、⑤、⑪～⑬、⑮）を選択した。

なお、「重要度の平均値 2.0 未満」の項目を選択しても、「暮らしの満足度」を評価する上で重要な項目であることには変わりがないことは前述のとおりである。

(3) 回帰モデルの検証

回帰モデルの推定結果をまとめると、結婚の幸福度の分析については、表 7 のようになった。

なお、このモデルは、2 つの合成変数を「要因となる項目」とし、結婚の幸福度の数値をそのまま「結果となる項目」として用いた重回帰モデルであり、「要因となる項目」「結果となる項目」とも市町別の平均値を使用した。

■表 7：回帰モデルの推定結果（女性の結婚の幸福度）

推定結果		
説明変数	回帰係数	定数項
暮らしの満足度	-5.095	80.625
結婚の決定要因	-9.661	

※回帰係数・定数項ともに 5%水準で有意であることが認められた

回帰係数や定数項が有意であると認められたことは、「暮らしの満足度」や「結婚の決定要因」が結婚の幸福度と相関関係があることだけではなく、「暮らしの満足度」や「結婚の決定要因」が結婚の幸福度に影響していることを意味する。

ただし、その逆の、結婚の幸福度が「暮らしの満足度」や「結婚の決定要因」に影響をしているという意味ではない。

なお、回帰係数の符号がマイナスとなっているが、これは「暮らしの満足度」と「結婚の決定要因」の回答選択肢の数値が小さくなるほど、「満足している」や「重視した」度合が高くなるよう設定しているためである。

一方、結婚の関心度の推定結果は表8のようになった。

結婚の幸福度の場合と同様、これは、結婚のイメージ度が結婚の関心度に影響を与えているという意味での相関関係が確認できたことを意味する。

従って、未婚者の結婚に対するイメージが良いほど、結婚の関心度も高くなる傾向があるという関係が適切に示された結果となっている。

■表8：回帰モデルの推定結果（女性の結婚の関心度）

推定結果		
説明変数	回帰係数	定数項
結婚のイメージ度	0.711	32.488

※回帰係数・定数項ともに5%水準で有意であることが認められた

また、表9は、表8で示された「要因となる数値」である結婚のイメージ度を説明するために導入された回帰モデルの推定結果を示したものである。

こちらは、統計理論上の理由により、結婚のイメージ度を「結婚すれば幸福になる」「幸福にならない」とする2値に変換した項目を使って回帰モデル（2項ロジスティック回帰）の推定を行っている。

なお、回帰係数の符号がマイナスとなっている理由は、前述のとおりである。

■表9：回帰モデルの推定結果（結婚のイメージ度）

推定結果		
説明変数	回帰係数	定数項
暮らしの満足度	-0.285	0.918

※回帰係数・定数項ともに5%水準で有意であることが認められた

(4) 結婚の幸福度・関心度と経済的要因との相関

最後に、結婚の幸福度・関心度と、経済的要因との相関関係などについて、表10のとおりまとめた。

表10は、回答者の「年収」（問6）、「結婚生活の開始に必要なと思われる世帯年収」

(問 36) の平均値のほか、市町別の結婚の幸福度・関心度と、「年収」との相関係数を示している。

これを見ると、女性の結婚の幸福度と男性の年収との間に強い相関が認められ、男性の年収が女性の結婚の幸福度に影響を与えていることが分かった。

また、若者が結婚しない理由について、一般的に、経済的要因が強いと言われているが、未婚者が結婚に必要なだと思っている夫婦の年収よりも、未婚男女の年収の合計の方が高いことが分かった。

このことから、若者の結婚に対する意識には経済的要因以外のものも影響していることがうかがえる。

■表 10：結婚の幸福度・関心度と経済的要因

配偶者の有無	指標	性別	年収との相関係数		年収(万円)	結婚生活の開始に必要な世帯年収(万円)
			男性	女性		
既婚	結婚の幸福度(既婚者)	男性	0.26	0.01	491	528
		女性	0.55	0.22	224	
未婚	結婚の関心度(未婚者)	男性	0.18	0.30	327	
		女性	0.16	0.13	248	

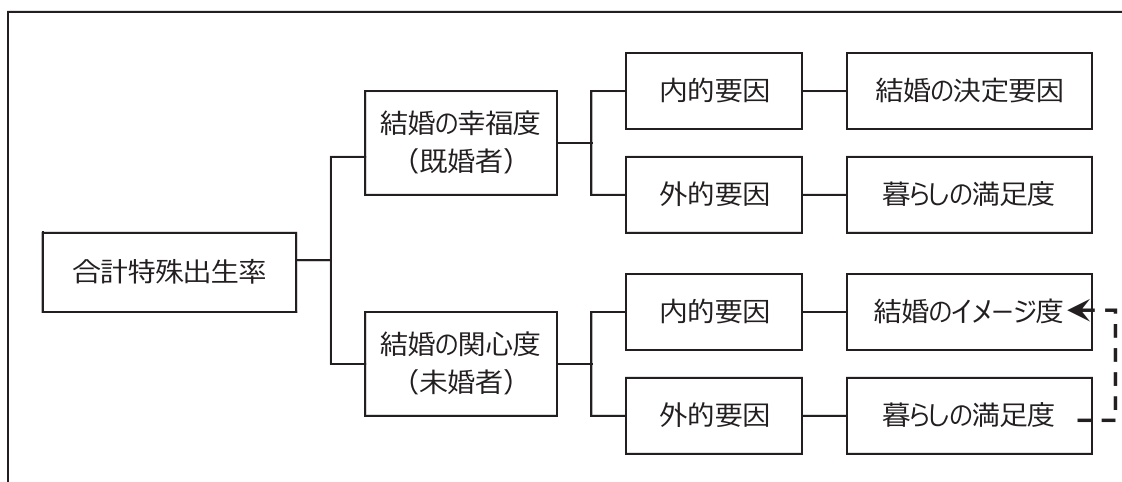
※相関係数：0のとき無相関、-1、1のとき相関関係が最大

相関係数が0.50以上の場合(強い相関がある場合)は黄色で表示

なお、相関係数が5%水準で有意であることが認められた

5. 分析結果のまとめ

本章の分析の枠組みは、以下のとおりである。



なお、若者の結婚（生活）に対する意識と合計特殊出生率について、本章で明らかにした点を要約すると、次のとおりである。

○既婚者の結婚（生活）に対する意識について

- ・女性のみ、結婚の幸福度（＝自身の結婚生活に対する評価）と合計特殊出生率（H20～H24）との間に強い（正の）相関関係が認められた。
- ・このことから、現在の合計特殊出生率に、既婚女性の結婚に対する意識が影響を与えている可能性があることが明らかになった。

○未婚者の結婚に対する意識について

- ・男女とも、結婚の関心度（＝自身の将来の結婚についての関心の程度）及び結婚のイメージ度（＝自身の将来の結婚生活に対する前向きなイメージの程度）と合計特殊出生率（H20～H24）の間には、あまり相関関係が認められなかった。
- ・一方、男女とも、結婚の関心度（＝自身の将来の結婚についての関心の程度）と将来の合計特殊出生率を左右する要因になると考えられる「将来予定する子ども数」との間に、強い（正の）相関関係が認められ、また、女性の方が男性より強い相関があることも認められた。
- ・このことから、将来の合計特殊出生率に、未婚女性の結婚に対する意識が影響を与える可能性があることが明らかになった。

○女性の結婚に対する意識に影響を与える要因について

- ・女性の結婚の幸福度・関心度には、住民が暮らしに重要と思っている「失業の不安がないこと」「仕事をしながら子育てをしやすい環境であること」といった項目についての「暮らしの満足度」が影響を与えていることが認められた。
- ・このことから、居住している市町における「暮らしの満足度」が、結婚の幸福度・関心度・イメージ度に影響を与え、ひいては、合計特殊出生率に影響を与える可能性があることが明らかになった。